

### 3. 4才児リーダーシップ訓練の一実験

小 川 再 治

#### 〔序 論〕

リーダーシップに関する心理学的研究は極めて多いが、その大部分はリーダーシップの測定に関するものである。また、これらの研究の大半は、グループ・ダイナミックスの分野に属するものといえよう。ところが、教育心理学的見地に立って、リーダーシップの訓練をテーマにした研究は案外少い。この種の研究は、測定的な研究よりも、実際に研究を行なうに当つて、手数や制約が多いということも、研究が少い大きな理由であろう。しかし児童のパーソナリティーの教育をより前進させるための、基礎資料を提供するものとして、この種の実践的応用的研究は必要性が高い。今後大に行なわれなければならないと考える。

次に、比較的教育心理学の分野に関連のある、リーダーシップ研究の文献を紹介したいと思う。(やはり、測定的な研究が、大部分であるが) Yong, L. L., etc., (文献1) Bonney, M. E., (文献2) Hardy, M. C. (文献3) Tryon, C. M., (文献4) Kuhlen, R. G., etc., (文献5)等は、学級集団における社会的地位を規定する要因について研究した。彼等は、学級の中で社会的地位が高い者と低い者に対して、いろいろなテストを行ない、どのような行動特性が、生徒の社会的地位の高低を規定しているかを追求しようとした。

1例として Bonney の研究の概要を紹介する。彼は小学校4年生に対し、上記の方法を適用し、社会的地位を高める行動特性として、次のものを見出した。

1. リーダーシップがある。
2. 友情が深い。
3. 感じがよい。
4. 明朗である。
5. まじめに勉強する。

以上の諸研究は、社会的地位や役割と、行動性や性格は、相互依存的であることを示唆する。つまり、「リーダーシップ」その他の要因が、社会的地位を規定しているが、道に社会的地位が高い者は、ますます「リーダーシップ」を発揮する機会がふえ、これが、高まるのではないかと考えさせる。また、上記の研究では、学級内の孤立者は、「内気」「無口」「行動に自信がない」「劣等感」などが行動特性として現われると指摘されている。この孤立者について考えても、社会的地位が低いことが、ますます上のような行動特性を強めていると思われる。

中野佐三（文献6）等は、以上の研究から示唆されて、リーダーシップ訓練の実験を行なった。この研究はリーダーシップ訓練のすぐれた研究として、稀少価値をもっている。中野等は、児童生徒に地位や役割を与えることによって、行動性が変容し、リーダーシップなどが高まるのではないかと予想した。彼等は小学5年生を対象にし、学級内で社会的地位がほぼ中位にある者を選出し、学級委員などのリーダーシップを発揮せざるを得ない地位につかせた。そして、その後の社会的地位の変化を厳密な方法で測定した所、彼等児童の大多数は社会的地位が上昇し、特に「自尊感情」と「リーダーシップ」が高まったという。

上述の研究は小学生対象のものであるが、幼稚園児を対象にしたこの種の研究はほとんど見発らない。筆者は幼稚園でも低年齢層に属する幼児に、このような訓練の実験を試みた。その狙いは、既にのべた所に関連するが、幼稚園のパーソナリティー教育への基礎資料を提供することにあった。中野等の研究では、社会的地位に関する要因の中で、特に「自尊感情」と「リーダーシップ」が高まったといっているが、筆者の場合は問題を一応「リーダーシップ」にしばって、やはり幼児を、リーダーシップを発揮せざるを得ない場面におく訓練を課し、果してリーダーシップが高まるかを測定しようと試みたのである。

ただし、筆者は中野等の場合と異り、数人のメンバーでチーム・ワークを保ちつつ大規模に研究を進めるための共同研究者が得られず、しかも研究に充て得る日時も多くないので、彼等の場合のような、何種類かの方法を併用した大規模な予備調査や、広範な測定、徹底的な訓練などは諦めざるを得なかった。しかし小規模ではあっても、なるべく厳密な研究条件を保持する努力は、惜しまなかったつもりである。

## 〔方 法〕

理在多くの幼稚園を見学すると、リーダーシップなどの社会性の訓練を行なっている所と、行なっていない所とがある。前者は比較的数が少いが、研究施設的な幼稚園

### 3.4 才児リーダーシップ訓練の一実験

などの内には、可成り組織的に行なっている所もある。しかし今回の研究対象としては、後者の訓練を行なっていない幼稚園の方が望ましい。何故ならリーダーシップ発達に影響する要因を、研究者が統制し易いからである。この種の訓練を特にやっていない幼稚園は多数あるので、選択のための苦労は少なかった。筆者が研究をお願いした都内の某幼稚園は、手技、一斉授業的な遊戯などに重点をおいている。そして自由遊びの時間に保育の方は一緒に遊ぶことはあるが、特に社会性訓練に行なっていない。この幼稚園の3・4才児を研究対象にした。期日は37年4月～38年1月。この幼稚園は3・4才児約20名を一括して1クラスを編成している。この内から10名を選出し、被験者とした。この10名の内訳は、クラスの中でリーダーシップの程度が中位の者8名、下位の者2名である。中野等の実験では、リーダーシップ中位の者だけを被験者にしたが筆者は試験的に、リーダーシップ下位の者も加えてみた。なお、この10名を選出した手続きは、次のつである。

(a) 自由遊び時間中に示す、Parten (文献7) の leadership ratio。なお、この ratio は、下記の leadership scale によつて求める。

- すべての仲間を支配する…………… +3
- 相互に支配したりされたりする…………… +2
- 一部の仲間を支配し、他の一部の仲間には支配される…………… +1
- 孤立している…………… -1
- 他のすべての仲間に支配されている…………… -2

(b) 2人ずつの組合せで5分間自由遊びをやらせ、これをリーグ戦の形式で、かな

第1表 被験者の年齢, IQ, leadership ratio

	年 令	IQ	leadership rati		年 令	IQ	leadership rati
E <sub>1</sub>	3才9月	93.3	1.7*	C <sub>1</sub>	4才1月	93.9	1.5
E <sub>2</sub>	3 : 9	102.2	1.6	C <sub>2</sub>	3 : 10	104.4	1.9
E <sub>3</sub>	3 : 11	89.4	0.9	C <sub>3</sub>	4 : 2	82.0	1.2
E <sub>4</sub>	3 : 5	102.4	1.7	C <sub>4</sub>	3 : 11	106.2	1.4
E <sub>5</sub>	4 : 1	112.2 <sup>**</sup>	-2.7	C <sub>5</sub>	3 : 8	95.5	-2.5

\* この値は、leadership scale の +1 と +2 の中間やや +2 寄りであったことを示す。

\*\* E<sub>5</sub> と C<sub>5</sub> の IQ 差がやや大である点で、両群の等質性がやや欠ける。

り多くの組合せについて行なう。そして2人の内どちらが相手をリードしているかを記録する。この記録に基づきクラス内の上下関係のソシオグラムを作成し、その中位および下位の者を選出する。

(c) 保母の観察資料による。

以上の手続きで選んだ10名を、リーダーシップ中位の者4名、下位の者1名からなる等質的集団に2分し、それぞれを実験群・統制群とする。実験群・統制群の幼児をそれぞれ  $E_1 E_2 E_3 E_4 E_5$ ,  $C_1 C_2 C_3 C_4 C_5$  と命名する。 $E_4 C_4$  は男。他の8名は女。 $E_5 C_5$  はリーダーシップ下位。他は中位の者である。被験者の実験開始時の年齢, IQ (鈴木ビネーによる), leadership ratio を第1表に示す。

実験群だけに、37年10月から38年1月にかけて、合計15回のリーダーシップ訓練を行なった。この訓練は1回30分で、実験群・統制群を一緒にした10名で自由遊びをやらせる。筆者を保母が同室し、実験群の幼児は、1日1回又はそれ以上、リーダーシップを発揮せざるを得ない「場面」に直面させる。この場面は、次の3つである。

(1) 電車ごっこ(輪をつくってその中に3名だけ入る。一番先頭の者が運転手。他の者は駅員などになる)の運転手をやらせて、行先や乗り組むメンバーを決定させる。(床にチョークで白線を何本か引き、線路とし、行先は4ヶ所位設けてある)

(2) 電車ごっこの駅長をやらせ、笛を吹かせて電車を発車させたり、電車の行先を決めさせたりする。

(3) ままごとの父親あるいは母親の役をやらせ、外の幼児に子供役を命じ、子供に色々の指示を与えさせる。

次にリーダーシップ発達程度の測定法について述べる。第2表(i)(ii)(iii)の3回の時期に測定を行なった。

第2表 測 定 の 時 期

実験群・訓練実験進行状況	
(i)	訓練開始前 (37年10月初)
(ii)	訓練8回終了の時期 (37年11月中旬)
(iii)	訓練全部終了の時期 (38年1月末)

具体的測定法は、被験児選択の場合の方法を参照にし、より条件を厳密にした、( $\alpha$ ) ( $\beta$ ) の2種である。

### 3.4 才児リーダーシップ訓練の一実験

(α) 実験群・統制群計10名を一括して、20分間自由遊びをやらせ、その間に各幼児の Parten の leadership ratio を求める。観察者は筆者外1名。各幼児をあらかじめ定めた順に従がい、1分ずつ観察し、これを2回反復する。各幼児の観察時間を20秒づつに区切り、その20秒間は leadership scale のどの項目に該当したかを記す。2つ以上の項目が現われた時は、より優勢と判断した方の項目を採用する。筆者と共同観察者は同一幼児を同時に観察し、別個に記録する。後で2人の観察データーをつき合せ、2人が一致している項目だけを採用する。観察者を2名としたのは観察者による主観的な偏り、癖などを消去するためである。各幼児の leadership ratio は、筆者の以前の研究(文献8)に基づき、次の公式により求める。

各単位時間得点合計

6

(β) 実験群・統制群各1名ずつの2名の組合せで、5分ずつ自由遊びをやらせ、20秒単位で観察時間を区切り、各単位時間にどちらの幼児がリーダーシップを発揮したか、あるいはどちらの子もこれを発揮しなかったかを記録する。記録は(α)と同様筆者外1名で別個に行ない、最後に記録を照合する。そしてどちらの子がリーダーシップにおいて優勢であったか、あるいは優劣なかったかを記録する。なお、2名の組合せは次の7組である。

$E_1 : C_1, E_2 : C_2, E_3 : C_3, E_4 : C_4, E_5 : C_5, E_1 : C_5, E_5 : C_1。$

なお、その外に参考資料として、担任保母の自由遊び時間中の観察資料を併用した。

## 〔結 果〕

先ず(α)の結果を第3表・第4表および第5表に示す。

第3表, (α) 実験群・統制群評定点 AV および SD

	(i)		(ii)		(iv)	
	AV	SD	AV	SD	AV	SD
実 験 群	0.18	1.67	0.38	2.05	0.94	1.48
統 制 群	0.60	1.47	-0.03	1.48	0.40	1.47

	t'		
	(i) : (ii)	(i) : (iv)	(ii) : (iv)
実験群	0.15	0.68	0.44
統制群	0.61	0.18	0.41

第3表, (α) 両群の(i) : (ii), (i) : (iv), (ii) : (iv)  
の有意差検定

いずれのケースも有意差なし(危険率5%)

第5表 (α) 各被験児の評定点

	(i)	(ii)	(v)
E <sub>1</sub>	+ 1.7	+ 2.0	+ 2.0
E <sub>2</sub>	+ 0.3	+ 1.7	+ 1.6
E <sub>3</sub>	- 2.0	- 2.0	- 1.3
E <sub>4</sub>	+ 0.9	+ 1.3	+ 2.7
E <sub>5</sub>	- 2.0	- 1.1	- 0.3
C <sub>1</sub>	+ 0.9	+ 0.3	+ 1.2
C <sub>2</sub>	+ 1.2	+ 0.3	+ 0.5
C <sub>3</sub>	+ 0.9	+ 1.2	+ 0.8
C <sub>5</sub>	+ 2.0	- 1.3	+ 1.5
C <sub>5</sub>	- 2.0	- 2.0	- 2.0

次に (β) の結果を、第6表に示す。

第6表 (β) の 結 果

	(i)	(ii)	(v)
E <sub>1</sub> : C <sub>1</sub>	E <sub>1</sub>	×	E <sub>1</sub>
E <sub>2</sub> : C <sub>2</sub>	C <sub>2</sub>	C <sub>2</sub>	×
E <sub>3</sub> : C <sub>3</sub>	×	C <sub>3</sub>	C <sub>3</sub>
E <sub>4</sub> : C <sub>4</sub>	E <sub>4</sub>	E <sub>4</sub>	C <sub>4</sub>
E <sub>5</sub> : C <sub>5</sub>	×	×	E <sub>5</sub>
E <sub>1</sub> : C <sub>5</sub>	E <sub>1</sub>	E <sub>1</sub>	E <sub>1</sub>
E <sub>5</sub> : C <sub>1</sub>	C <sub>1</sub>	C <sub>1</sub>	C <sub>1</sub>
実験群優勢 のケース数	3	2	3
統制群優勢 のケース数	2	3	3

数表中の×は、一対2名の幼児に、リーダーシップにおいて優劣が認められなかったことを示す。表中に“E<sub>1</sub>”とある場合は、E<sub>1</sub>がリーダーシップにおいて相手に勝っていたと評定されたことを示す。

なお、参考資料として用いた、保母の自由遊び時間中の観察結果によると、実験群が統制群に比して、特にリーダーシップが高まったとは思えないとのことであった。

### 3.4 才児リーダーシップ訓練の一実験

#### 〔考 察〕

( $\alpha$ ) ( $\beta$ ) および参考資料としての保母の観察結果は、いずれの訓練効果に対して否定的である。

まず ( $\alpha$ ) について述べると、この Parten の scale は今回の研究目的に応じるには、目盛りが粗過ぎることが反省される。むしろ田中次熊郎 (文献 9) が Parten, M. の social participation scale (社会参与尺度) を参照して作った、「社会的行動の類型」などを用いるべきであったと思う。この尺度であれば、10種類あるいはそれ以上の類型があり、今回のようなデリケートな発達的变化を測定するにふさわしかったと考える。

しかし今回の粗い尺度に基づく限りは、第 3 表・第 4 表に示したように、実験群に統制群に比しての、訓練効果があらわれていない。実験群は、(i)→(p)→(v) と時期を経るに従って僅かに値が上昇しており、統制群にはこの傾向があらわれていない。しかし両群の差は、誤差の範囲内にあるので、特に訓練効果があったとはいえない。

次に、第 5 表の各被験児の成績についてみると、実験群には、 $E_2$   $E_4$   $E_5$  に多少効果らしいものが無いともいえない。特に  $E_5$  は  $C_5$  に比して、多少進歩のあとがみえる。これに反し、統制群には、特に進歩した者が見当らない。この個人別にした成績からみた場合にのみ、特定の幼児に多少訓練効果らしいものがある。しかしこれも、誤差の範囲から出る程のものでは無く、やはり訓練効果にポジティブなものといえない。

この、訓練効果にネガティブな傾向は、( $\beta$ ) によっても裏付けられる。(i)→(p)→(v) と時期を経るに従って、実験群が優勢であるケース数は増加していない。特に(i)以後、訓練を 8 回終了した(p)では、実験群優勢のケースは、減少さえしている。(i)では  $C_1$  をリードした  $E_1$  は、(p)ではリードできなかったし、(i)で優劣のなかった  $E_3$  と  $C_3$  には、(p)では  $C_3$  が逆にリードしている。訓練 15 回を終った(v)においてさえ、実験群が優勢になったとはいえない。

そして更に、参考資料とした保母の日常の観察結果も、訓練効果に対し否定的で、( $\alpha$ ) ( $\beta$ ) の結論を裏付けた恰好になった。

次に効果が上らなかった理由については考えると、次の 3 項が推測される。

(1) 訓練時間が限定された短時間であったため、訓練時間以外に雑多な要因が交錯して影響したこと。

(2) 訓練方法に不備があったこと。

(3) 実験群の幼児に、リーダーシップを発揮するのは、特定の訓練場面だけのこととして認識され、従って他の場面への転移が生じにくかったこと。

以上の推測された3つの理由の内、(3)については、転移を生じ易くする方法などに、考慮改良の余地があるかも知れない。しかし(1)と(2)は、今回のような研究方式では、改良が困難である。(1)についていえば、普通幼稚園に、今回以上の実験時間を要求するのは、仲々むずかしいことである。また、(2)について考えてみても、今回以上に実験条件を求めるのも、可成り困難と思われる。

従って、今回計画した主旨の訓練実験で効果を得るためには、中野佐三(文献6)等が小学生対象に行なった実験のような、数人の研究者がチーム・ワークを保ち乍ら行なう、大規模な計画と厳密な条件統制とに力を入れた研究を、研究施設的な幼稚園で行なう必要があると考える。

### 〔今 後 の 方 針〕

現在では上述のような大規模な研究をやる共同研究者が見当らないので、今回計画した主旨の研究を、その方向に更に押し進めるのは困難と思われる。従って、今後は方針をやや変更したいと考える。

まずリーダーシップの訓練を行なっている幼稚園と、行なっていない幼稚園を探し出し、2つの幼稚園から、リーダーシップ発達の程度、知能、性格、家庭状況などのなるべく近似した幼児を何名か選出し、リーダーシップ発達の相違を捉えたいと考えている。

ただし、このような研究の最大の困難点は、研究条件の統一化ということであろう。2つの幼稚園々児の生活環境の甚だしい相違、あるいは訓練以外の雑多な要因の交錯などを考えると、容易ならぬ困難性を痛感する。しかし、この研究を何とか成功させて、幼児リーダーシップ訓練の基礎資料を、提供したいと希望している。

### 〔附 記〕

今回の研究は、本学より授与された、36・37年度特別研究費によって行なったものである。

### 〔文 献〕

- (1) Young, L. L., and Cooper, D. H. ; Some factors associated with popularity. "Journ. Ed. Psychol.," 1944.



### 3.4 才児リーダーシップ訓練の一実験

- (2) Bonney, M. E. ; Personality traits of socially successful and unsuccessful children. "Journ. Ed. Psychol.," 1943.
- (3) Hardy, M. C. : Social recognition at the elementary school age. "Journ. Soc. Psychol.," 1937.
- (4) Tryon, C.M. : Evaluation of adolescent personality. (In Barker, R.G. ; Child behavior and development. Mc-Graw Hill, 1943)
- (5) Kuhlen, R. G., and Lee, B. J. ; Personalistic and socially acceptability in adolescence. "Journ. Ed. Psychol.," 1943.
- (6) 中野佐三・長島貞夫・田中熊次郎・斎藤定良・中村陽吉：社会的役割の加工の性格並びに集団に及ぼす影響について“集団指導の Action Research”第4分冊, 1956.
- (7) Parten, M., ; Social behavior of preschool children. (In Barker, R. G., ; op. cit.)
- (8) 小川再治：5・6歳ろう幼児の遊戯集団に試みた実験的研究——「集団最上位に位する者」について——“心理学研究”29巻4号, 1958.
- (9) 田中熊次郎：児童集団心理学, 明治図書, 1957.

(本学助教授)